魏志倭人伝を考える
―斯馬国についてー

塩田泰弘

1　斯馬国の所在地

「魏志倭人伝」は、魏使が帯方郡から邪馬台国に至るまでの行程で立ち寄った対馬国から不弥国までの６カ国と投馬国については、次の国に向かうために辿る海路又は陸路の出発時の方向、国を統治している官、戸数等について記しているが、その他の国については、「女王国より以北、その戸数・道里は得て略載すべきも、その余の傍国は遠絶にして得て詳らかにすべからず」として国名のみを挙げている。すなわち「次に斯馬国あり、次に己百支国あり、次に伊邪国あり、次に都支国あり、次に弥奴国あり、次に好古都国あり、次に不呼国あり、次に姐奴国あり、次に対蘇国あり、次に蘇奴国あり、次に呼邑国あり、次に華奴蘇奴国あり、次に鬼国あり、次に為吾国あり、次に鬼奴国あり、次に邪馬国あり、次に射臣国あり、次に巴利国あり、次に支惟国あり、次に烏奴国あり、次に奴国あり、これ女王の境界の尽くる所なり。」で、21 国である。魏使は、これらの 21 国についても立ち寄った国々などから国名のみでなく所在地やその国の様子などについて情報を得ていたことは十分考えられることであるが、「魏志倭人伝」には国名のみの記載でその他の記述は一切ない。このため、これらの国々の所在地については、国名と地名の類似性などから推測するよりほかになく、比定地を考えることが難しくなっている。

しかし、この 21 国の中で唯一斯馬国については、他の文献に所在地の手掛かりが記されている。その文献は「翰苑(かんえん)」である。「翰苑」の中に「邪届伊都傍連斯馬」という一文がある。この文の読み方には諸説ある。例えば、「邪（や・邪馬台国）は伊都（いと・伊都国）に届(いた)り、傍(かたわら)、斯馬（しま・斯馬国）に連(つら)なる。」、「邪」は「斜(なな)めに」とも読まれるので、「斜(なな)めに伊都国に届(とど)き、傍らに斯馬国が連なる。」などと読まれている。いずれの読みにしても、斯馬国は伊都国のそばにあるということを示しているのである。伊都国は、現在の糸島市怡土（いと・古くは筑前国怡土郡）付近であり、これにはほとんど異論がない。斯馬国は、伊都国（怡土郡）に連なっているところにあるので、その近くで「シマ」という音に近い地名のところというと現在の糸島半島の糸島市志摩町を含む一帯のほかにはない。糸島半島は、糸島市志摩町と福岡市西区の一部からなっており、律令時代以来筑前国志摩郡と呼ばれ、「志麻」、「嶋」とも書かれていた。正倉院に残る日本最古の戸籍と言われ、国の重要文化財に指定されている、「筑前国嶋郡川辺里戸籍断簡」（大宝２年　702 年）にも「嶋郡」と見える。なお、筑前国は、旧福岡藩一円にほぼ相当（怡土郡の一部に旧豊前中津藩と対馬府中藩の飛地領がある。）し、糸島半島はその北西端にある。「魏志倭人伝」に記す当時の国は律令時代の１～２郡に相当する規模と言われており、旧志摩郡は斯馬国に比定するには妥当な規模と考えられる。また、旧志摩郡は、1956 年（明治 29 年）旧怡土郡と合併し、怡土志摩郡となり、転じて糸島郡となる。1955 年（昭和 30 年）当時の旧志摩郡西部の４村が合併し志摩町（東部の４村はその前後に福岡市に編入）となり、2009 年（平成 20 年）、前原市、二丈町と合併し、糸島市志摩町となって現在に至っている。

ここで、「翰苑」について少し述べる。「翰苑」は唐（618 年～907 年）の時代に張楚金が撰したもので、660 年ごろには成立していたと言われている。対句練習用の幼学書として作られたと言わ

れ、30 巻で構成されていた。1917 年に太宰府天満宮宝物調査の際に写本 1 巻が発見された。9 世紀の平安時代初期に書写されたものとみられ、これが「翰苑」の原本、写本を通じて、世界で唯一現存しているものである。「天下の孤書」と言われ、国宝に指定されている。この 1 巻は、第 30 巻とみられ、蕃夷部であり、匈奴、烏桓、鮮卑など中国周辺の夷蕃の国々について記しており、この中に倭国も記されている。現存する「翰苑」（太宰府天満宮写本）は、誤字、脱字が多く、史料としては使いづらいものであるが、現存しない文献を多数引用しており、また、現存している諸文献であってもそれぞれ異なっているものも多いため、比較検討するための数少ない貴重な史料である。体裁は、短く本文を書き、これに割注をつけており、本文は大きな文字で、割注は小さな文字で書かれている。

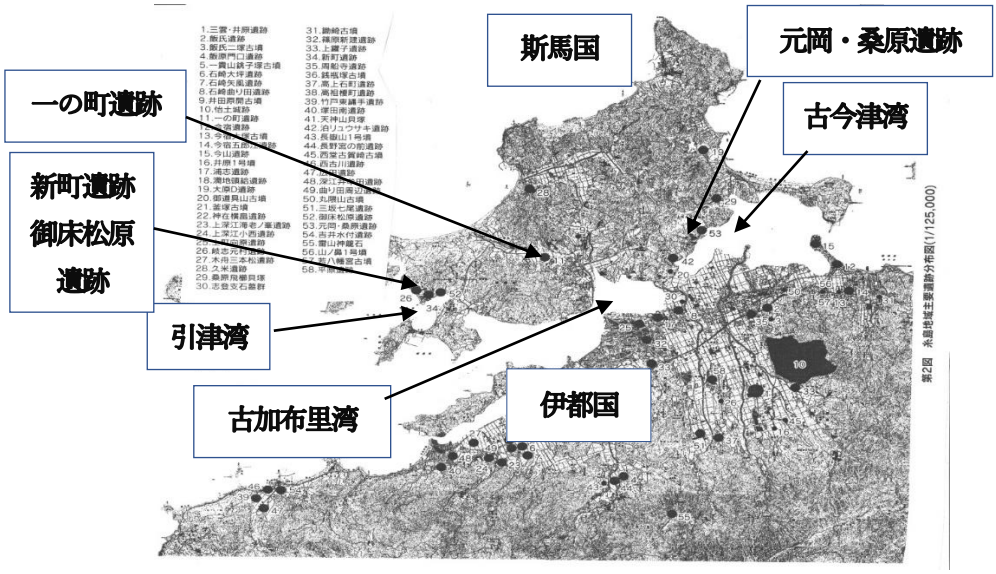
ちなみに「翰苑」の倭国の条の本文の一つに「中元之際紫綬之榮」とある。これは、後漢の光武帝の建武中元二年（56 年）に、倭の奴国が朝貢した際に、光武帝が印綬を下賜したことについて記したものである。後漢書では光武帝が下賜したものは、「光武、賜うに印綬を以てす。」と、「印綬」とのみ記されており、印の色も綬（印の紐穴につけられる紐）の色も記されていない。ところが「翰苑」では「紫綬」と記されている。「紫綬」は、金印につけられる綬であることから光武帝が倭の奴国に下賜した印は、金印であることがわかるのである。そしてこの金印が、1784 年（天明 4 年）福岡県の志賀島から発見され、国宝に指定されている金印である。因みに、印の材質は、上位から玉、金、銀、銅の順とされ、綬は、多色（皇帝が 6 色）、綟（萌黄）、紫、青、黒、黄の順とされている。「魏志倭人伝」には景初二年（三年の誤り）に卑弥呼が魏に朝貢した際に、魏の明帝から「親魏倭王」に制詔され、金印紫綬を仮されたことが記されている。また、その使節として魏に赴いた難升米及び牛利がそれぞれ率善中郎将、率善校尉とされ、共に銀印青綬が与えられている。

なお、印綬の使用方法であるが、中国においては、重要な物品をいれた容器や木簡・竹簡を紐で梱包し、その結び目に泥を巻き、これに印を押し、封緘した（封泥という。）のである。封泥の印面の文字により封緘した者の職や身分が証明された。印は、懐に入れ、印の紐に通した綬を腰にまわして結んでいた。綬が人目に触れることにより、皇帝の権威が背景にあることを誇示することができたのである。倭国における使用方法も同様なものであったろうと考えられる。

2　旧志摩郡の古代遺跡

糸島半島の旧志摩郡は、現在は九州本土と一体化しているが、当時は古加布里湾が西から、古今津湾が東から深く湾入しており、細い地峡で旧怡土郡（隣国の伊都国）とつながっていた（下図参照）。旧志摩郡には、一の町遺跡、久米遺跡、大原 D 遺跡、岐志元村遺跡、新町遺跡、御床松原遺跡、本岡・桑原遺跡などの弥生時代を含む縄文時代から古墳時代の遺跡が多数確認されている。

図１　弥生時代の糸島半島



（注）　「三雲・井原遺跡Ⅷ－総集編―　糸島市文化財調査報告書　第 10 集」（糸島市教育委員会）に国名・地名・遺跡名を加筆した。本図は当時の地形である。

これらの遺跡の主なものについて、概略述べると次のとおりである。

○　新町遺跡

新町遺跡は、縄文時代から古墳時代の遺跡で、昭和 61（1986 年）年、当時の志摩町教育委員会により第一次調査が行われ、弥生時代早期及び前期の支石墓を含む 57 基の墳墓群が確認された。支石墓は完全な形で残っていたものが 7 基、上石のみが 3 基、支石のみが 10 基で、確認された墳墓のうち約 3 分の一が支石墓であったとみられている。この遺跡からは人骨も計 14 体が検出されたが、保存状態が良いものは 9 号支石墓に埋葬されていた一体のみである。

支石墓は、朝鮮半島でよく認められる埋葬形態であることから、志摩郡が朝鮮半島と積極的な交流があったこと、また、新町遺跡では土器に稲籾の圧痕があることが発見されており、稲作が既に行われていたことが判明する。これらのことから人骨は、高顔、高身長の渡来人タイプと予測されていたが、9 号支石墓の人骨の分析の結果、縄文人や西北九州人の特徴である低顔・低身長などの形質に合致する点が多いことが分かった。当地の人々は、朝鮮半島と積極的な交流を行い、その文化を取り入れながら弥生時代の早期・前期には既に稲作に代表される先進的な文化を築いていたことが窺われるのである。

なお、新町遺跡は 2000 年（平成 12 年）に国史跡に指定された。

○　御床松原遺跡

御床松原遺跡は、新町遺跡に近接しており、糸島半島の西側、玄界灘に面し、引津湾を望む標高５～６メートルの低砂丘上に所在する、弥生時代から古墳時代の集落遺跡である。1917 年（大正 6）中山平次郎により一枚の貨泉（中国・新の王莽が天鳳元年（14 年）に鋳造した貨幣）が発見されたことで注目され、1963 年（昭和 38 年）には鉄戈が発見されている。昭和 57 年（1982 年）の発掘

で弥生時代前期の竪穴住居祉１軒、土壙１基、中期の竪穴住居祉 21 軒、土壙 18 基、後期の竪穴住居祉 11 軒、土壙１基の、併せて竪穴式住居 33 軒、土壙 20 基などが出土した。また、多量の弥生土器、半両銭１点、貨泉２点、夥しい石錘・太形蛤刃磨製石斧・石包丁・石鏃などの石器類、鉄斧・鉄製釣針・アワビオコシ状鉄器・鉄素材などの鉄器類が出土した。石錘は釣り糸や網の錘として、釣針・アワビオコシは漁具として使用された。貨泉、半両銭などは弥生後期前半が下限で、遺跡・遺物の絶対年代を探るうえで貴重なものである。さらに朝鮮系無紋土器なども出土しており、広い地域と交渉があったことを物語っている。

○　一の町遺跡

一の町遺跡は、志摩半島の中西部に位置し、北の火山（224 メートル）、南の可也山（365 メートル）の間に開けた地峡部に展開している、推計７万平方メートルの弥生時代前期から古墳時代前期までの遺跡で、発掘調査により弥生中期から後期にかけての大規模な集落遺構が検出された。床面積 50 平方メートルを超える大型建物数棟を含む掘立柱建物 19 棟以上、竪穴住居１棟、円形竪穴住居４棟、土壙群、夥しい量の祭祀系土器群、楽浪系土器 11 点、三韓系土器７点、方格規矩鏡片、漢式三角錐鏃、銅鏃、鉄鏃などが検出された。掘立柱建物の主軸は概ね統一性があり、掘立柱建物と竪穴住居が規則的に整然と配置され、集落内における建物の配置が計画された意図によるものであることを表している。この背景にはリーダー的な集団の成層化あるいは首長層の生成があることが推測され、建物群は有力者層の居所、あるいは集会所等という祭祀や政治的な拠点として存在していたものと推測されている。

○　元岡・桑原遺跡群

元岡・桑原遺跡群は、九州大学の移転用地（約 276 ヘクタール）として造成される広大な地域の中にあり、平成８年から 27 年まで 66 次にわたって発掘調査が行われた。遺跡群は縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。66 次の調査のうち 42 次と 52 次調査について述べると、調査区は約 8,700 平方メートルと元岡・桑原遺跡群で行われた発掘調査の中でも広く、東から深く湾入した古今津湾に面した地域から丘陵部に至る地域で、掘立柱建物８棟と竪穴住居跡４軒が確認されているほか、コンテナケースで約１万箱に及ぶ遺物が出土した。このなかには、五銖銭、貨泉など漢・新代の貨幣９点、辰砂の粒子、小銅鐸２点、小型仿製鏡４点のほか一定の間隔で検出され、漁網や網などに括りつけられた状態で埋まった可能性がある大型石錘、鋤先口縁壺・広口壺・鋤先口縁甕・高杯・蓋形土器・複合口縁甕・甕形土器などの土器類、杓子・匙・火鑽臼(ひきりうす)・鉄斧柄・刳物容器などのほか木製品、剣形木製品、トリの線刻画を刻んだ琴の部材、木偶、陽物などの祭祀遺物が確認された。弥生中期から後期の遺物と考えられている。

出土遺物からは、この遺跡群が弥生時代中期から後半期（紀元前１世紀～紀元３世紀）頃に、漁労や農耕が活発に行われるとともに、海外・国内各地の交流拠点、祭祀の拠点であったことを示している。

3　斯馬国と邪馬台国

糸島半島の旧志摩郡は、縄文時代から弥生時代を通じて稲作に代表される先進的な文化が築かれ、多数の掘立柱建物群・竪穴住居群などの集落遺構、鉄鏃などの鉄製武器、鉄製農漁具、祭祀遺物、銅鏡、漢代の貨幣などが出土しており、有力な首長クラスのリーダーが統治していたことが窺われ、「翰苑」の記述からも「魏志倭人伝」にいう斯馬国に相応すると考えられる。

斯馬国が糸島半島にあったことは、邪馬台国の所在地にも大きく影響する。斯馬国は、「その余の傍国は遠絶にして得て詳らかにすべからず」として「魏志倭人伝」に国名だけを記されている 21 か国の最初に挙げられている国である。ところが斯馬国は遠絶どころか、魏使が辿った行程上にある伊都国に隣接している国であった。このことは 21 か国のすべてが魏使が辿った行程に隣接し、または、その近辺に所在していたことを証明するものではないが、これらが北部九州に所在していることを推測させるものと考える。考古学者の高島忠平氏は、邪馬台国は北部九州にあり、北部九州には遺跡の分布からみて「魏志倭人伝」にいう「使訳通ずる所三十国」程度の国数は十分にあったと唱えており、斯馬国が糸島半島にあった旧志摩郡に比定されることは、少なくとも邪馬台国が九州にあったとする説にとっては有利に働く。邪馬台国が近畿にあったとする説では斯馬国は、現在の三重県（伊勢国、志摩国、伊賀国の各全域と熊野国の一部）を構成する志摩国などに比定しているが、この比定は難しいことになる。なお、志摩国は、元は全域が志摩郡であったが、養老 3 年（719 年）答志郡と佐芸郡（すぐに英虞郡に改称）に分割されて消滅し、明治 29 年（1896 年）に復活している。

斯馬国が伊都国に隣接していながら「その余の旁国」とされたのは、「魏志倭人伝」が限られた文字数で倭人の国を説明するために、魏使が辿った対馬国、一岐国、末蘆国、伊都国、奴国及び不弥国を経て邪馬台国に至るまでの行程上にある国々を中心に記載し、その行程の周辺や行程から離れた国々については、所在地、統治している官、戸数等の記載を省略して国名だけを記載したものと考える。

参考文献

竹内理三　校訂・解説　「翰苑」　吉川弘文堂　1977 年
西谷　正　「魏志倭人伝の考古学」　学生社　2009 年
佐原　真　「魏志倭人伝の考古学」　岩波現代文庫　岩波書店　2003 年
志摩町教育委員会　「志摩町文化財調査報告書第 30 集　一の町遺跡発掘調査概要」　志摩町教育委員会　2009 年
志摩町教育委員会　「新町遺跡―福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査―志摩町文化財調査報告書　第 7 集」　志摩町教育委員会　1987 年
糸島市教育委員会　「新町・御床松原遺跡　糸島市文化財報告書第 2 集」　糸島市教育委員会　2010 年
西谷　正　編　「伊都国の研究」　学生社　2012 年
福岡市教育委員会　「元岡・桑原遺跡群 29―第 42 次（5）・52 次調査の報告―　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1354 集」　福岡市教育委員会　2018 年

福岡市教育委員会　「元岡・桑原遺跡群 25―第 42 次調査報告（4）―　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1276 集」　福岡市教育委員会　2015 年

高島忠平　「邪馬台国は何処に」　朝日カルチャーセンター福岡教室講座　2012 年度後期（10 月～2013 年 3 月）

その他

塩田　泰弘（しおた　やすひろ）

1945 年熊本県生まれ。

2012 年退職時に友人に勧められて大学の古代史に関する公開講座を受講したことから、従来からの古代史好きが高じてのめり込む。現在、大学の公開講座、カルチャーセンターの講座、講演会等に通い、諸先生の著書、遺跡の発掘報告書などを購読するなど、勉学に勤しんでいる。

論文「魏志倭人伝からみた邪馬台国概説」（「季刊　邪馬台国」126 号　梓書院）

論文「魏使が辿った邪馬台国への径と国々」（「季刊　邪馬台国」131 号　梓書院）がある。